書　評

森永康子・神戸女学院大学ジェンダー研究会編

『はじめてのジェンダー・スタディーズ』

三　浦　欽　也

その昔、第１次ベビーブーマーによる全共闘運動が挫折に終わり、それ以降の世代において、青年期の血気盛んな若者のエネルギーが１つのイデオロギーに向かって収束していくことは絶えてなくなった。しかし、そのエネルギーそのものが失われたわけではなく、その向かう行き先こそさまざまに分散したとはいえ、それぞれの時代において、それなりの求心力を持った、いくつかの「中心」があったように思う。私のように、中学生の頃に中ピ連[1)]の活動とその波紋をテレビで眺め、学生時代には上野千鶴子らの言説が一部マスコミを賑わせ、そして「アグネス論争」[2)]などをつぶさに見てきた世代にとっては、「フェミニズム」もまた、確かにその時代の空気を反映した「中心」の一つであったと思う。

その頃、特に1980年代ぐらいには、「フェミニズム」は一つの流行と言ってもよいくらいの広がりを見せていたし、そこにはある種の熱気のようなものが漂っており、旧来の思考に囚われずに、物事を「正しく」捉えるには、フェミニスト的視点を持つこと（本書によれば、ジェンダー・センシティブと言うらしい）が不可欠であると、少なくとも一部の層では信じられていたように思う。

一方、最近の学生のエネルギーがどこに向かっているのか、私も中年オヤヂになってしまったせいか、残念ながら良くはわからない。しかしながら、私自身の感覚では、当時ほどは「フェミニズム」は流行していないようだし、熱気

のようなものもあまり感じられない。常識となって定着したということであれば問題ないのだが、どうも彼女ら／彼らが、あまり「ジェンダー・センシティブ」であるようにも見えない。

セクシュアル・ハラスメントやストーカー被害やDV（ドメスティック・バイオレンス）などといった、ジェンダーと深いかかわりを持つ情報は、毎日の様にマスコミから流れてくるが、昔も今もマスコミは興味本位の取り扱いで、よほど「注意深く」接しないと「ジェンダー・インセンシティブ」なステレオタイプに囚われてしまいがちである。「ジェンダー・センシティビティ」とは、この「注意深さ」の筈であるが、昨今の学生を眺めていると、いかにも不用意で、はなはだ心許ない印象を受ける。もっとも、6000年前の楔形文字の時代から、「近頃の若いモンは…」というのがイイ大人の口癖らしいので、これも中年オヤヂたる私の取り越し苦労であるのかもしれないが。

さて、前置きが長くなったが、この本『はじめてのジェンダー・スタディーズ』である。「はじめての」という枕詞が示すとおり、この本は初学者に向けて書かれた本であり、主に学生を対象として想定しているようである。先に書いたように、昨今「ジェンダーのジェの字も知らない」学生が多いのだとすれば、時宜を得た好企画であると言えよう。また、ステレオタイプに囚われずに主体的に情報を取り入れる習慣を身に付ける事は、いわゆる情報リテラシー教育にもつながるものであり、情報教育に携わるものとしても好ましい企画であると考える。

本書は全体が12の章に分けられており、各章ごとに担当執筆者が個別のテーマについて論じるという形式を取っている。この形式は、初学者向けの本としては適切なものであったと思われる。第一に、各章がある程度独立していて、それぞれテーマを絞って書かれているために、非常に読み易い。章の長さも肩がこらない程度に短く、それも読み易さに寄与している。一つ一つの章は紙数が限られているため、あまり深くは掘り下げられない場合もあるものの、本全体を見渡した時には、多彩な執筆者によって広範囲のテーマがカバーされてお

り、全体的には「広く・浅く」なっており、これもまた、初学者にはむしろ適切であると思われる。また、各章ごとに適切な参考図書が挙げられており、より深い学習を求める読者の必要に応じられるようにもなっている。配慮が行き届いている。

各章の間には、学生の体験談やコラムが挿入されている。この学生の体験談は、想定される読者である学生にとって、非常にリアルな問題提起となることが期待される。また、コラムは、各章の執筆者よりもさらに広範な分野の研究者が執筆しており、本文の内容を補完すると共に、「ジェンダー・スタディーズ」の広がりを示す役割を果たしている。

第一章は、全体の導入部分として、「男らしさ」「女らしさ」とは何か、ということについて論じ、「ジェンダー」とは何かを解説している。身近な例を引きながら、易しい語り口で書かれたこの章は、以下の章を読むための前置きとして、有効に機能するように思われる。

第二章以降、第十一章まででは、学校・恋愛・家族・主婦・母性・仕事・身体・セクシュアリティ・性暴力・メディアなど、社会のさまざまな局面における、ジェンダーにまつわる問題が語られている。いずれも、読者にとって身近に感じられるであろうテーマが選ばれており、やはり初学者に適した内容であると思われる。ただ、少し苦言を呈しておくと、第八章の身体に関する章では、「身体醜形障害」などのあまり一般的でない難解な語が用いられており、章末に解説が付いているものの、本文中には注記号もないので、章末まで読み進めてからでないと解説に気がつかないような構造になっている。これは、やはり注記号をつけておくべきではなかったかと思う。

また、複数の執筆者で分担されているため、立場や考え方の違いが現われていたり（例えば第４章とコラム12での家庭観の相違など）、用語の意味する内容に若干のゆらぎがあったりするようにも思われる。もっとも、学問としての「ジェンダー・スタディーズ」においては、研究者によって、さまざまな立場や考え方の相違はあるわけで、そのことが文章中に現われること自体は決して

悪いことではなく、むしろ、「ジェンダー・スタディーズ」の現状を正しく反映していると言えるかもしれない。よくよく考えれば、本書の執筆者間には、実際にはもっと大きな隔たりがあると推測される。それらをかなり周到に隠して、うまく全体を統一していることはもっと評価して然るべきかもしれない。ただ、例えば本書を講義の教科書として用いるような場合には、受講生の混乱を避けるために、いくらかの注意を払う必要があるようにも思う。

一方、第九章・第十章のようなセクシュアリティの問題は、多くの人が興味を持っているにもかかわらず、おおっぴらに論じられることが少なく、特にステレオタイプが幅を利かせている領域なので、これを取り上げていることは積極的に評価したい。ただ、「性同一性障害」については、最近になって治療としての性転換手術が認められたことがマスコミ等で話題になったので、興味を持っている読者も多いと思われる。もう少し詳細に解説しても良かったのではないかと思う。

最終の第十二章では、「フェミニズム」あるいは「ジェンダー・スタディーズ」の歴史的経緯が語られ、他の学問領域との関係も概観される。また、アカハラ（アカデミック・ハラスメント）についても忘れずに言及している。ただ、-ism としての「フェミニズム」と、学問としての「女性学」あるいは「ジェンダー・スタディーズ」との相違と関係については、あまり明確に示されているとは言い難い。

ところで、「女性学」あるいは「ジェンダー・スタディーズ」に対しては、それらが本当に学問たりうるのか、という、執拗に繰り返される古くて新しい問いがある。この問いには、「女性学」あるいは「ジェンダー・スタディーズ」が、学問に必要なある種の精密さを欠いているのではないか、という疑問を暗黙に含んでいるように思われる。つまり、その学問全体の「見取り図」や、総体的な「知」の中における「位置付け」が明確になっていないのではないか、とか、そこで用いられる言語の（特に用語の）意味内容にゆらぎがあり、精密な議論や思考が不可能なのではないか、という疑問である。

このような疑問は、「ジェンダー・スタディーズ」に限らず、学際的で、未だ進展著しい学問には常に付きまとうもので、これは、ある意味では仕方のないことであるとも言える。まだまだ変化が大きいので、「見取り図」や「位置付け」を無理に固定してしまうと、将来の進展の可能性を摘み取ることになるし、言語に関して言えば、その学問分野での議論に必要な語彙が揃い、オントロジーが確立するまでの過渡的な状況では、そのような意味のゆらぎは必要なことであり、逆に語彙が揃わないうちに意味を限定してしまうと、その分野での議論や思考の柔軟性や豊かさを損なうことになるからである。

しかし、用語の問題はともかく、「見取り図」や「位置付け」は初学者にとっても重要な情報であり、厳密ではなくても、このような情報は初学者に必要であると思われる。本書は、先に触れたように、この疑問に対しては充分に答え得ていないので、この点でいささか疑問を呈する向きもあろうかと思う。

ただ、本書が「学者を養成すること」よりも、読者の「ジェンダー・センシティビティ」を涵養することに重点を置くのであれば、そして、そのような視点から本書を見れば、先に述べたようにすぐれた点を多数備えている。個人的には、それを高く評価したい。

うちのゼミの学生にも読ませたいと思う。

（北大路書房、2003年２月、247頁、本体2,100円＋税）

注

1）中絶禁止法に反対しピル解禁を要求する女性解放連合の略。1972年に結成された団体。ピンク色のヘルメットをかぶり、過激な活動をしていた。

2）1987年に、タレントのアグネス・チャンが子供を連れてテレビ局に出勤したことに端を発した、子連れ出勤の是非をめぐる論争。日本流行語大賞大衆賞を受賞するほどの社会現象となった。